

史 談

2012 (H24) 8・25

■ 研究発表会を開催しました

6月30日(土)に研究発表会を開催しました。発表者は平吹利数氏で、「野仏に秘められたもの」と題し、平成11年から19年まで行った「白鷹町石造文化財悉皆調査」の成果を発表していただきました。



調査結果から、白鷹町には、中山入口の山神社境内にある宝篋印塔型庚申塔などの珍しい石造文化財が存在することや、調査の過程で隠れた道や忘れられた集落の存在が浮かび上がったり、石塔に刻まれた文字を通して、先人の信仰の有り様や集落の歴史を知ることができたことなどを教えていただきました。

貴重な文化財でありながらも、管理の行き届かないものがあることもわかり、今後の保存活動の大切さも考えさせられた一日でした。

■ 「文化財巡り」の第1回を行いました

本年度の文化財巡りは白鷹町の置賜三十三観音を巡ることとし、2回に分けて行うこととしました。第1回は7月15日(日)に、川東の地区にある観音堂を巡ることにしました。

あいにくの雨模様でしたが、10数名の参加を得て、午前9時に中央公民館を出発しました。

午前中は松岡観音、杉沢観音、広野観音を拝観し、住職様や管理している方々の説明をお聞きしながら、普段はなかなか見られない堂の内部や本尊の観音様まで拝んできました。



お昼をあゆ茶屋でいただき、午後からは関寺観音、仏坂観音、新山観音と巡った後、ちょうど特別公開が行われていた塩田の行屋の仏像群を見て、午後3時に中央公民館で解散しました。

第2回の文化財巡りは、鮎貝や蚕桑など、川西地区の観音を巡ることにしています。9月30日(日)を予定していますので、多くの方々の参加を期待しています。

■ 鷹山歴史散歩 2 竹田伊智子

(「会報 24」からの続き)

6 子育て延命地蔵

萩野の石塚という所に地蔵堂が建っている。中に2体の石像があり、子育て地蔵なのでよだれ掛けやお供え物が絶えない。

毎年、4月の下旬の日曜日に旗を立て、だんごなどを供えてお祭りを行っている。祭りやお堂の維持管理については先祖から代々伝えられていて、昔から関わりのある川部家と紺野家2軒の3軒で行っている。

お祭りの時に立てる旗には「奉献 南無地蔵大菩薩 大正12年旧3月24日講中」と書いてある。事の経緯については不明だが、昔、「この場所を掘ってほしい」と願う者がいて、掘ってみたところこの2体の地蔵様が出てきたのだという。地蔵の一体は小柄で、もう一体はふっくらとしている。

一方、このお堂は南町内の寺地区にあったといわれる廣大寺の門前の位置にあたっていたのではないかと。寺に行く道は今の道ではなく、田んぼの中だったという話を耳にした。

7 八家坂

この坂は遠く朝日連峰が見え、坂の下には田んぼの

稲穂がゆれる眺めのよいところで、ときどき絵を描くために来られる方もいるという。

ここは、本当は「八景坂」ではなくて「八家坂」である。大同元年、行基上人が行脚で通られ、急な坂のところに8軒の家が建っていたところから「八家坂」と呼ばれていたが、山形交通のバス停ができた時に看板に「八景坂」と書かれてしまい、以後、「八家坂」が「八景坂」になってしまったとか。

昔はもっと曲がりくねっていて、冬はソリやズリ乗りのメッカだったという。昭和27年に村中からの協力を得て改修し、今のようにまっすぐになり、その後は除雪のために昭和56年にコンクリートをかけて消雪道路が完成した。南側には「南八家坂」がある。

8 細野の庚申塔

細野の街道沿いには、かつて19軒の家があって賑っていた。現在は11軒で10月の末には庚申講を行ったという。ここの庚申塔は国道348号線の道路改修によりグラウンドの脇を通過して高台に移動して建てられた。

さて、庚申講は民間信仰のひとつ。人間の体の中には「三尸の虫」がいて、いつもその人の悪事を監視しているという。そしてその虫は庚申の夜、人が寝ている間に天に昇ってその人の悪事を報告し、寿命を縮めたりすると信じられていた。

そこで庚申の夜は「三尸の虫」が天に昇らないように、村の人が集まって飲食しながら夜を明かしたのが「庚申待ち」である。ここにある庚申塔は3年、18回の講を記念して建立されたものだが、塔は各地に残っている。この辺で珍しいものとしては折居公民館脇にはサルが3匹立っているものや、中田の山の神にはニワトリと横向きの3匹のサルが彫られた庚申塔がある。(続く)

※これは鷹山地区公民館の館報297号から307号に掲載されたものを再構成したものです。なお、前号の「たがき石」の項で使用したお堂の写真は、今回の「子育て延命地蔵」の写真でした。お詫びして訂正致します。

■ 塩田の行屋の追調査が行われました

塩田の行屋については、東北芸術工科大学教授の長

坂一郎先生、講師の岡田靖先生を始めとして、本会会員の宮本晶朗氏も加わって、昨年調査が行われました。その成果については、昨年度の研究発表会で宮本氏に発表していただきましたが、未調査分があるとのことで、7月7日(土)、8日(日)の両日に渡り、追加の調査が行われました。

その結果、「御沢仏」と呼ばれる仏像群について新たな発見がありました。宮本氏に詳しい報告書を書いていただきましたので、掲載します。

塩田行屋本堂の明治期諸像について：「御沢仏」といわれる湯殿山信仰の仏像群

宮本晶朗

○はじめに

塩田行屋の仏像について、白鷹町文化交流センターと東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターとの共同調査が平成23、24年度に行われた。この成果は23年度に開催した企画展「塩田行屋の仏たち」で発表した。が、「御沢仏」といわれる仏像群については同展開催時には研究が不十分であったため、本稿ではこれを扱う。なお、詳細については拙稿をご覧ください。

○本堂安置の謎の仏像群

本堂には由来がわからず、また通常見慣れぬ25点の諸像が一具(一揃いの群像)として安置されている。今回の調査でそれらは新海宗慶(1846~1899)によって明治12年に制作されたことが判明したものの、宗教的な役割や意味はわからないままであった。諸像それぞれの尊名は台座に記されているが、「波分不動明王」、「飯ノ山白衣明王」、「護身仏」、「大聖仙人」などのように通常見られないものが多く、また形状の面でも両手とも施無畏印を表す如来形坐像など通形とは異なるものが多い。明治期制作かつ特殊な尊名であることから、今までほとんど研究対象とされず、奥村幸雄によって、湯殿山中やお山詣りの途中で拝んだ仏像であろうⁱⁱⁱⁱ、という指摘が唯一あるのみであった。

○「御沢仏」といわれる仏像群

この指摘から文献調査を進めると、諸像の尊名は

「御沢仏」といわれる仏像群のものとはほぼ一致するこ



写真は須弥壇中央の御沢仏

とが判明した^{iv}。御沢仏とは湯殿山詣の「御沢駆け」の行程で見ることができる特徴的な岩などを神仏とみなしたものである^{vi}。御沢仏は、湯殿山の大自然そのものを神格化したものであるがゆえに、湯殿山系寺院で最も重視されるといわれ^{vii}、大日坊（彫刻群）と海向寺（版木）に遺例が見られる^{viii}。

塩田行屋の御沢仏が造像された目的は、同行屋をあたかも「小さな湯殿山」とするためと考えられる。参拝者が同行屋の御沢仏を拝することで、湯殿山自体には詣でずとも同様の功德があるものとして作られたのではないだろうか。

○本堂と御沢仏との関係

御沢仏は本堂内陣の須弥壇3段に配置されており、諸像の寸法と数量は須弥壇に配置できる面積とほぼ等しい。また、本堂が棟上げされたのが明治13年（今回の調査で判明）、御沢仏が制作されたのが12年で、ほぼ同時期である。須弥壇の大きさと制作時期、この2つの一致から、本堂は御沢仏を納めるために建立されたと思われる。

○まとめ

御沢仏は湯殿山詣の御沢駆けに関係したもので、仏像群全体で湯殿山自体を表す。これを造像・安置することによって塩田行屋を「小さな湯殿山」とみなすことが可能となるような、本来は同行屋において最重要の信仰対象だったのだろう。同行屋の御沢仏は、白鷹町と湯殿山との関わりや信仰のあり方などの点から、大変貴重な文化財であるといえる。

ⁱ 岡田靖、宮本晶朗「展覧会およびその調査から展

開する地域文化遺産の保存活動：白鷹町塩田行屋の仏像（町指定文化財および新海宗慶・竹太郎作の明治期諸像）を事例として」『東北芸術工科大学文化財保存修復センター紀要』No. 2、2012年

ⁱⁱ 奥村幸雄「置賜地方における民間信仰の謎」『史談』第22・23号合併号、白鷹町史談会、2007年 p. 33

ⁱⁱⁱ 『出来町御八日講』内に大正4年に書かれた「奉納湯殿山御拝経」の項がある。八日講とは湯殿山講を示す。

^{iv} 内藤正敏『修験道の精神宇宙：出羽三山のマンダラ思想』青弓社 1991年 p. 158-159

^v 岩鼻通明『出羽三山の文化と民俗』岩田書院、1996年 p. 103-105

^{vi} 内藤『前掲書』 p. 151-157

^{vii} 内藤『前掲書』 p. 149-150

^{viii} 内藤『前掲書』 p. 161

■ 村山民俗学会の深山観音堂の落書調査

8月18日（土）に村山民俗学会の野口一雄会長さんほか5名の方々、山形大学准教授の三上喜孝先生も加わって、深山観音堂の落書と境内の「立置もかたみとなれや…」と刻まれた石碑の調査を行いました。

史談会からは江口儀雄氏と私（守谷英一）が案内を兼ねて参加しました。



今回の調査は天童若松寺に残されている落書の「書きおくもかたみとなれやふでのあと我はいずくの土となるらん」という歌が、深山観音堂境内の石碑に刻まれている歌と類似していると考えられたので、その確認を行うことが主な目的でした。

9時30分ぐらいからほぼ午前中一杯にかけ、調査

を行いました、歌については「立ておくも」と「書きおくも」の違いはあるものの、同類の歌と見て良いだろうということでした。

この歌は、多少形を変えながら、山形、新潟、四国や九州などの堂宇に書かれているということで、江戸初期の巡礼たちが書き残したのだろうと三上先生は考えています。

巡礼たちが書き残した落書は、「かたみかたみ」や「いろはにほへと」などのバリエーションがあるとのことでしたが、深山観音堂内部の壁に書き残された落書の中に、数多くの「かたみかたみ」を発見できました。また、「慶長」という年号が読み取れるものや、「長門」などの国名が記されているものも見つか、若松寺の落書とのつながりが感じられました。

深山観音堂の近くには、湯殿山への参詣道である道智道が通じていることは広く知られています。その道を通って来た人々が、深山に残していった「かたみ」が落書という形で今日に残されているのだろうと思います。

今回の調査で、私たちがこれまで知らなかった世界が一つ開かれたように思います。今回の調査では十分に時間をかけることはできなかったようで、再度調査の必要があると三上先生はおっしゃっていました。より詳しい調査が待たれるところです。

※若松寺の落書については8月22日の読売新聞文化欄に三上先生のインタビューを基にした記事が掲載されています。併せて御覧ください。

(守谷英一)

■ 文化財巡りの2回目を予定しています

先にも書きましたが、文化財巡りの2回目を9月30日(日)に予定しています。当日は、荒砥仲町のきつね祭りの昼祭りの日ですが、首都圏白鷹会の方々もきつね祭り見物ツアーを企画していると聞きました。あわせて、是非観音巡りにも参加していただこうとの考えで、期日を設定しました。

詳しくは、役員が集まって計画を作り、皆さんにお知らせすることとなりますが、あらかじめ皆さんに概要だけお知らせしますので、予定を組んでいただくとともに、御友人をも誘って御参加いただければと思

ます。

- 1 期日 平成24年9月30日(日)
- 2 内容 白鷹町の置賜33観音巡り
川西地区の観音堂
- 3 参加費 2,000円程度
- 4 その他 今年度は置賜三十三観音の御開帳をしています。普段はなかなか見られない堂の内部まで拝観できるものと期待しています。

■ 会報の編集担当が変わりました

この号から、編集担当が丸川二男から守谷英一に交代しました。いきなり4ページの編集ということで、原稿を集めるのに苦労しています。

幸い、前号からの連載があり、また、宮本氏から調査したばかりの塩田の行屋の仏像群について報告を書いていただきました。おかげさまで、前号にそれほど劣らないものにできたのではないかと思います。

なお、皆さんの原稿をお待ちしています。身近な話題でも、書きためた原稿でもかまいません。おおむね1,000字程度を目安としますが、長いものは数回に分けて掲載したいと思います。編集担当の守谷までお寄せください。

ワープロなどの電子データでいただける場合は、メールに添付していただければそのまま使うことができますので便利と思います。なお、守谷の電話はファックスが兼用ですので、それで送ってくださっても大丈夫です。下に連絡先を書いておきますのでよろしくお願いいたします。

各号の発行は偶数月の20日を予定しています。発行月の10日あたりまでいただければ、その月の号に掲載できると思います。会合の案内や、知りたいことの呼びかけなども掲載できればよいと考えます。重ねてよろしく申し上げます。

守谷英一(もりやえいいち)

郵便番号 992-0831

住所 山形県西置賜郡白鷹町荒砥甲814

電話およびファックス

0238-85-0371

メール moriya-eiichi@nifty.com